

# 秋



## 鬼灯ほおずきを上手じょうずにならずえくぼ罨えくぼかな

季語…鬼灯

ほおずき遊びをする子も少なくなってしまうた。皮を破らないように種を抜いて作ったものを、口に含んで鳴らすのだがコツがある。少女たちの代表的な遊びの一つだった。上手に鳴らす女の子のそのたびにできるえくぼが愛らしいと、井月さん。

## 魂棚たまだなや拾ひろはれし子の来ておが拜む

季語…魂棚

伊那でのお盆ぼんは先祖の霊れいを迎むかえてきて、マコモむしろをしつらえて臨時りんじにつくった棚に安置する。井月さんの時代は親と生き別れたり、里子に出されたりする子も多かった。そんな子が盆棚にむかっていじらしく手を合わせている。

## 除け合うて二人ぬれけり露の道

季語・露

細い道を歩いて行くと、向こうからきた人と出会、お互いが道をゆずろうとよけあつて草露に濡れてしまった。思いやりとやさしさがあつた時代である。さりげない日常の「こまを詠った句」。

## 駒ヶ根に日和定めて稲の花

季語・稲の花

伊那の西駒ヶ岳の裾野である駒ヶ根に、穏やかな天候をねらい定めたように稲の花を咲かせる。昔は立春から二一〇日目、九月一日の台風がよく来るころに稲の花が咲いた。穂ばらみの大切な時期。台風と重ならず今年はおかげで豊作にまちがいない。

## 稲妻や藻の下闇に魚の影

季語・稲妻

稲妻の瞬間、水草の下闇に隠れていた魚がくつきり見えた。一瞬の自然現象をみごとにとらえた井月三二歳の時に詠んだ句である。長野の善光寺の位の高い役人の編さんした句集にあった。

## 草木のみ吹くにもあらず秋の風

季語・秋の風

秋風が草木を揺らし、やがて冬枯れの季節を迎える。だが秋風は草木だけに吹くのではない。この世のあらゆるものにたいして吹く。井月さんにも。井月さんの心を詠っているのだろうか。

杖かしてやりたき萩の盛かな

季語・萩

萩は咲き垂れて地を掃く。そこで杖をかしてやりたいと井月さん。昔から親しまれた花。萩は秋の初めころ赤紫色の可憐な花を開き、秋の中ころ散りこぼれる。四季の自然とともに生活を送った井月さんらしいやさしさが出ている句。

落栗の座を定めるや窪溜り

季語・落栗

わが身を窪地に転がる落ち栗にたとえた。ついに伊那を墳墓の地と定めた井月さんのあきらめとも悟りともとれる気持ちが見取れる。



冬



冬ざれや壁に挟みし柄なし鎌

季語・冬ざれ

冬ざれは草木が枯れて荒涼とした様子をいう。草木を刈る鎌も長年使うと減って細くなる。柄も傷んで使えなくなった鎌を秋が終わっても捨てられず小屋の板壁に挟んでおく。柄なし鎌に農民のまごころがみえる。

掃よせておちばに雨を聞夜かな

季語・おちば

掃き寄せた落ち葉。そこに時雨がさーと来る。夜の静けさに枯葉が立てる雨音をじっときく。井月さんは、お堂かどこかに野宿をしたのだろうか。旅に生きる井月さんの寂寥感がせまってくる。

哀れさに憎気もさめて冬の蠅

季語・冬の蠅

冬の蠅の飛ぶ力を失って弱々しい哀れな姿。夏の威勢のよい時の憎さもすつかりさめた。もう一つの「冬の蠅牛に取りつく意地もなし」という句は、冬の蠅が牛に取り付こうとするがもうその気力もないと、老いた自分になぞらえたものであろうか。



## 春を待つ娘心や手鞠唄

季語・春を待つ

手鞠唄で手鞠をつきながら春待つ娘心を歌っている。寒い伊那の冬は、暖かな春が本当に待たれる。手鞠唄の季語は新年だが、「春を待つ」を優先して冬の句とする。

## 旭は浪を離れぎはなり鷹の声

季語・鷹

朝日が昇り、今まさに波をぎりぎり離れようとしている。早朝の冬の海の一瞬の荘厳な光景に、鷹の鋭い鳴き声があたりをつんざくのであった。絵画のような世界と鷹の声との組み合わせがすばらしい。

## 酒さめて千鳥のまことときく夜かな

季語・千鳥

夜半に目が覚めて一向に眠れない。酒の覚めた心に千鳥のまことの声がしみ入るのであった。千鳥の鳴き声は井月さんの真情を呼び覚まさせてくれる。